

ムカシの競馬を読む

平成9年・中山競馬場
中山金杯
優勝馬:シャドウゲイ

© JRA



第136回 10年・20年・30年前の1月



「年明けから珍事だ。6日の中山金杯で、馬複（筆者注：馬連）と馬單の配当が同額の1万60円。単純に考えれば馬複よりも馬單のほうが1.5倍から2倍の配当になつていいはずだが……（中略）JRAも明確な理由はつかめていない」

ちなみに馬連・馬單とも1万円ちょいなのに、3連単は2番人気馬がくつついただけで12万8千円。そこから察するに馬単が売れすぎたのだろう。このような現象は平場、特にローカルの午前中では見なくなっているが、重賞レベルで起こることはなかなかない。

続いて、この月から実施というのではないが、実施が決まったといふ月は、シャドウゲイトが優勝、アサカディフィートが2着の中山金杯で開けた。ただ、この中山金杯ではちよつとした珍事があつた。1月11日付のサンケイスポーツから引用しよう。

地点でようやくスタートした。約35馬身出遅れ。あとは馬群をほるか前に見て馬なりで一周しただけ。10頭立て10番人気、単勝161.4倍と離れた最低人気だつたため、スタンドは騒然よりも失笑。平目孝志騎手を背に直線に姿を見せると、ぱらぱらと拍手が起つた」心房細動でおおきな着差がつくことはあるが、普通に走つてこの着差は珍しいので記事になつたのだろう。残念なことに、心房細動などやむなき事情の有無はデータベースに収録されおらず、JRAの公式データに出遅れの有無や出遅れ幅というものはない。

調べられるのは単純に着差だけだが、実はどんでもない着差といふのは最近のほうが発生している。本記事のように勝ち馬から14秒差以上というレースは昭和61年以降426回ある(先述したように心房細動などもある)のだが、年間20回以上発生したことが、過去10年のうち6回。それより前だと昭和61年に23回あったところまで遡る。平地で50秒以上という壮成11年のレースだが、19回のうち11回は過去10年以内なので、タイムオーバーで半額になつても出走手当ては貰つてこいよ、というシビ

アさは最近のほうが強いのかもしれない。 続いてもうひとつ、9日付のサンスポより。

「19日に中山で行われる交流競走、吳竹賞で、ホッカイドウ競馬所属の佐々木明美騎手が、シルバーハイツに騎乗予定。これまで30人以上誕生している地方競馬の女性騎手として、史上はじめて中央の舞台を踏むことになった」

レースには後に重賞勝ち馬となるワシントンカラーがいて優勝したので勝ちようはなかつたのだが、6着と健闘、掲示板には惜しくも及ばなかつたが記念すべきレースとなつた。

このレースを皮切りに、地方競馬の女性騎手はこれまで10人が中央のレースに出走している。グリーンフームのパートナーにもよく参加している赤見千尋さんもそのひとり。現役騎手では復帰した宮下瞳騎手（名古屋）と別府真衣騎手（高知）が中央での騎乗経験を持っている。

最後に昭和62年の1月から。本連載ではよくノミ行為などの犯罪系案件を取り上げるが、30年前のP.A.T.もない時代にはそれだけノミ行為の「市場」も大きく、業界が抱える問題としても大きかつた。

そんなノミ行為の世界にも知恵

「大阪空港のタクシー待機場で、暴力団組員らが客待ちの運転手を相手に、公然と競馬のノミ行為をしていることがわかり、大阪府警豊中署と空港警備派出所は25日午後、捜査員十数人を動員してノミ行為の現場を急襲。競馬法違反で胴元3人を現行犯逮捕、張り客の運転手6人を検挙した」

ノミ行為はもちろん犯罪であり、しかも競馬経済を脅かす、我々が許してはいけない犯罪である。ただそれを前提としたうえで、この犯人たちは賢いなくと、つい感心してしまう面もなくなはない。

まずタクシー運転手というのは競馬ファン・ギャンブルファンが多いグループ。その人たちが長距離狙いの長時間客待ちでヒマをもてあましている。さらに、その人たちはラジオという、レース実況が聞けるデバイスを持っている……。その商魂だけは競馬主催者が見習えるかもしれない。

ちなみに、タクシー運転手に公営競技やパチンコ好きが多いのは、夜勤→空け番で昼間自由な時間があるから。私がかつてそうだった鉄道員なども勤務空けで公営競技に行くことは多い。

最後に昭和62年の1月から。本連載ではよくノミ行為などの犯罪系案件を取り上げるが、30年前のP.A.T.もない時代にはそれだけノミ行為の「市場」も大きく、業界が抱える問題としても大きかった。

魂だけは競馬主催者が見習えるかもしない。
ちなみに、タクシー運転手に公営競技やパチンコ好きが多いのは、夜勤→空け番で昼間自由な時間があるから。私がかつてそうだった鉄道員なども、勤務空けで公営競

「ディープインパクトが凱旋門賞失格となる原因になったトイプラトロピウムが、日本の禁止薬物リストに追加されることが17日、明らかになつた。現在は全国の競馬主催者による『禁止薬物に関する連絡協議会』で協議中だが、早ければ2月中にも決定し、来年1月1日から実施される」

前年秋のディープインパクトは凱旋門賞出走から後日の失格まで騒ぎが大きすぎて、敢えて本連載では触れなかつた。その代わりに1年があけてちよつと落ち着いた頃のこれをピックアップした次第。

薬物に関するルールというのはファンに周知されておらず、そのぶん分かりにくく、誤解もされやすい。基本的に薬物は「一度たりとも使ってはいけない」「レース何日前まで使用可」のように定められていい。英語表現では「〇クリアデイ

（中何日）とされる。厄介なのは、十分な代謝期間として設定されたこの期間を経てもなお残留することがある（馬の体質や体調などにより）ということで、そうなると「やつていいないここの証明」は難しい。また、悪意でないと分かつていても結果責任として失格になるともある。そういう仕組み論などは、もうとファンにしつかり伝えられるべきかと思う。

続いていまから20年前、平成9年の1月から。まずはこちらもレスの結果系。1月7日のサンスポから引用する。

「重賞ウイナーの意地が激しくぶつかった。先に抜け出したトーヨーシーントルに中団に構えていたシンコウウインディがゴール前、猛然と襲いかかる。2頭は鼻面を併せてゴールイン。わずかにシンコウウインディがかわしたかに見えたが、写真判定の結果は1着同着。重賞競走では昭和63年の阪神大賞典でのタマ

モクロスとダイナカーペンターでの決着以来JRA史上6度目のこと（以下略）

中央競馬の重賞1着同着は、昭和30年クモハタ記念が第1号。最近では皆さんご記憶の通り、オーケスアパペネとサンニミリオンが同着になっている。全部で9回記録されているが、ダート重賞での1着同着はこれが唯一だ。地方側で行われる交流重賞では帝王賞のナリタハヤブサ・ラシアンゴールドがあるが、当時はまだ統一グレードはついていなかった。

重賞の話から、今度は一転して新馬戦へ。まずは平成9年1月27日付の日刊スポーツから引用しよう。

「あれ、ゲートから1頭出ない馬が！」26日の東京2レース4歳新馬戦（筆者注：旧表記）ダート1400メートルに出走したコウセイキングは、ゲート内で立ち上がり、他馬が100メートル以上走った

ムカシの競馬を読む



須田鷹雄